

# はくさんさん

第120号 令和4年正月号

伊豆市 法住寺 発行

明けてまして

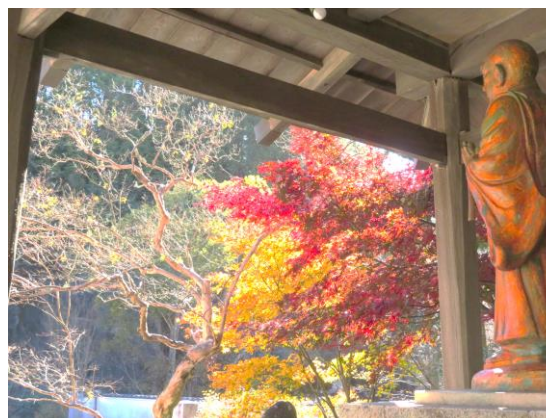
おめでとうございます

## お手入れ

去年の秋は暖かだったので紅葉はどうか  
と思っていたが、モミジの紅葉はきれいだった。  
落ち葉掃きをしながら周りの山々を見ると  
モミジに混じって雑木が目につく。大きく  
なってしまうと素人では手におえなくなる、  
切れそうな雑木を切っていく。山の急斜面に  
足を踏ん張りチェーンソー等で伐採する。そ  
の後の処理がけっこう大変で、場所によって  
は軽トラを使って枝や幹を処理、冬でもけっ

## 「寿量の祈り 敬意と感謝」

大自然 ありがとうございます。 合掌  
社会の皆さん ありがとうございます。 合掌  
ご先祖さま、家族の皆さん ありがとうございます。 合掌



顔のお手入れ等を思い浮かべるが、山も同じ  
で髪の毛を刈ったり髭を剃ったりするよう  
なものだなと思った。ウォーキング、サプリ  
メントは体のお手入れ、部屋の掃除や整理整  
頓もお手入れだと思う。

\*

こうな汗にな  
る。こうした手  
入れを檀家さ  
んが昔からや  
ってきた下さ  
ったことを改  
めて思う。  
作業しなが  
らこれは「山の  
お手入れ」だ  
なと思った。お  
手入れという

いと思う。急な斜面に足を踏ん張っての作業  
は危険である、だが何かを感じる。安全な世  
の中で眠っていた人間の奥底にある野生の  
力と云ったら大げさかもしれないが、命の根  
源みたいなものを感じる、いや感じてみたい  
ように思う。複雑な論理などはいらない、シ  
ンプルで気は集中する、清々しさがある。時  
代は変わり生活も変わっていくが、山の作業  
も一つの文化として出来る限り続けていき  
たいと思う。

\*

若い頃は学校へ勤め  
ていて余裕がなく、山  
仕事は単なる労働であ  
った。今マイペースで  
山に向かい合うことが  
出来ることはありがた



年が明けて新めて心のお手入れをしよう  
と思う。ボーツと暮らし(チコちゃんに叱ら  
れ)ながらも愉快に笑顔で暮らしていきたい  
ものだ。良い年であることを願うが、都合の  
良いことばかりとは限らない。何があっても  
ゆるがない、どっしりとした精神の大黒柱を  
持ちたいものだ。ありがたいことに私たちに  
は南無妙法蓮華経の大黒柱を日蓮聖人から  
頂いている。お題目をお唱えするごとに心の  
奥底の命の根源が活き活きしてくる。心のお  
手入れは南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、  
南無妙法蓮華経

今年も宜しくお願い申し上げます。

# 謹賀新年



## 法住寺護持会

〔総代、護持会長〕伊東修

〔総代、副会長〕伊東一衛

〔総代〕土屋正次

〔顧問〕山下一

〔世話人〕山崎正行、井本和男、

飯田昌之、室野和義、

山下武志、加藤正喜、

山下悦子、山田邦光、

森野智喜

〔監査〕小塚健治、小塚秀夫

## 中伊豆立正大題目講(当山)

〔会長〕山下要

〔顧問〕山下一

〔世話人〕伊東貞子、伊東すゑ子、

三田五月、伊東はつ江、伊東ちゑ子、

伊東通子、伊東ミナヨ、三田信子、

山下敏子、渡辺直子、小塚正司、

小塚康清、山下英子、小塚千恵子、

小塚みよ子、佐藤賢吾、杉山松子

## 伊豆連合大題目講(当山)

〔理事〕山下要

## お寺の庭に花いっぱい

昌子寺庭の山務日誌より

### 和顔施を覚えてくれた人

毎年のことながら今年の満天星(どうだん)紅葉も美しいものだった。朝の光、昼の光の中でこそ美しいとずっと思っていた。しかし人々が一日の営みを終えて家路につく頃の夕刻の美しさも格別な輝きをまわって、いつか秋になった。

その鮮やかな満天星の葉が散り始め水仙の花が咲き始めた頃私の母は逝った。妹夫婦をはじめ多くの方々にお世話なり働き者の母にふさわしい勤労感謝の日を選んだかのように逝ってしまった。

へさよならの時の静かな胸　ゼロになる体が耳をすませる

へはじまりの朝の静かな窓　ゼロになる体充たされてゆけ

という歌があるが、最後に小さな息を二回して眠るように逝った。おそらく全身の力で耳をすませて、私たちの声をきいていたと思う。ふと布団の中の手をみれば小さな手を合わせていた。おそらく意識はなくても母なりの

感謝の気持ちだったかと思う。(この原稿は正月号ですが、すいません。泣きながら書いています。)

\*

母には母なりの忙しさや苦労もあってどこに旅行にいくとか遊びにいくとかはなかったが、私たち三人の子供の教育と養育には、自分は何かを我慢してもつくしてくれた。そしてそれほど大変な中にもいつも「笑顔」で居てくれた。私は母の笑顔が大好きな子供であり、いつしか自分もこうありたいと思っていたにちがいない。私はとても幸せな子供だったのだ。

未知なるお寺に嫁いでいく時も母からは「瓜島さんのご両親は良い方、りっぱな方だからご両親を大切にされる様に」と言われた。四十年余たってもこのことは忘れられないでいる。親は教えたつもりもないのに子は学んだつもりもないのに、いつしか伝わっているのが心と思う。人を想う心、和顔施となつて。母の笑顔に近付きたいとおもいながら今年も皆さまとご一緒に。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

星まつり 1月30日(日)



## 大掃除

今年も有志の皆さんが大掃除をしてくださいました。遠くは川崎、沼津からも参加、位牌堂のお位牌を一つひとつ丁寧に拭いたり、内陣のワックスを掛けたり等々、ありがとうございました。昼食は湯でたての手打ちそばを松本之雄さんご夫妻がご馳走してくださいました。喉越しの良い絶品、美味しかったです。

午前10時 午後2時  
詳しくは別紙にてご案内します。

## うれしい投稿

先日大変うれしい出来事がありました。ある檀信徒さんが、この寺報を「みんなの『はくがんさん』にしたいね」と言って投稿をして下さいました。皆さんのちょっとした体験や思いを載せて「みんなの『はくがんさん』」を作っていきましょう。投稿をお待ちしております。

## 七面山で別の自分を発見

数年前、初めて七面山の登詣に参加した時の話です。十一月半ば、そろそろ冬の気配漂う季節、その日は小雨そぼ降る中、冷たい登詣となりました。洋明上人率いる十名位の一行でしたでしょうか。

五十丁に区切られた参道を、お題目を唱え休息を取りつつ山頂に重い足を進めて行きました。山門に着いた頃、ようやく雨もやみ下界は一面の雲海と夕焼けに安ど感と同時に早く宿坊で休息したい気持ちでいっぱいでした。その晩は入浴、ご開帳、お題目、食事を済ませ、それなりに仏門の世界に浸り修

行もどきの体験を致しました。

事件は翌朝起ききました。早朝ご来光を拝む為、凍えそうな外に出ると下界は一面の雲海、その上にぽっかりと頭を出した真っ白な富士の横からじわじわと昇ってくる朝日にお題目を唱えながら迎えていると、「正に神聖な世界とはこの事か!」と。すると知らぬ間に自分の目から涙が流れているのに気づきました。「おいおいこれはいったいどうしたことだ!ご来光なんて若い頃の登山で何回も見ているし、さほど感動すべきことではなく、その日の天候のバロメーターに過ぎなかったじゃないか!」。そんな過去の思いはすっ飛んでしまい、自分は自然界の小さな存在に過ぎなかったのだ。七面山と言う聖地と大自然の光景に包まれ、大きな安ど感に自然と涙が出てきたのか。今までになかった自分を発見した瞬間でありました。

そんな七面山での早朝の一場面でありました。下山した後、日常生活に戻ってふと思うことはあの日以来少し自分の人生観に変化を感じるのです。人それぞれの七面山、その時々々の七面山、一度体験してみるのも悪くはないと思います。(七面山登詣参加者より)





## 洋明さんのおはなし

皆さんと一緒に登詣がしたい！と始めた法住寺七面山登詣団参も十三年を迎えます。そこにある信仰、ドラマ、体験、喜びを一緒に分かち合う中に思ったこと。それは「母を連れて七面山へお詣りがしたい！」。しかし「膝腰を考えると無理だろう」と言う住職。母自身「一生のうち一度はお詣りしたいけど・・・」と不安を口にしていたのが四年前。それならば母が亡くなった後お骨を抱いてお詣りしようと考えていたところ「法華経・お題目は生きている教え、お経。亡くなった後ではなく今だぞ！」と七面大明神に教えて頂いたのが三年前。そして念願叶い初めて母を連れてお詣りが出来たのが二年前。

去年は、コロナ禍のこともあり中止にした七面山登詣団参でしたが、この秋ようやく皆さんとお詣りが出来その喜びを感じました。何とそこには二回目登詣の母の姿。この分だ

### 御志納金「十一月〜十二月」

元村 吉田 延之殿 愛弟葬儀  
練馬区 山下 泉 殿 尊兄葬儀  
沼津市 佐藤 清一 殿 永代供養

と二度あることは三度あるかもしれません。

\*

さて今回の七面山では菩薩行のドラマが。私はいつも最後尾をお題目の太鼓を打ちながら登ります。お題目を唱えながら思う事は、(皆が無事に登れますように！)唯それだけ。そんな中、途中で足を痛めてしまうか方が。秋の山はつるべ落とし、あつという間に日が暮れ寒くなります。そこで七面山登詣のベテラン檀家さんに先頭隊をお任せし、私と数人のサポート隊は足を痛めた方と一緒に。

全五十丁の山道の四十六丁目には和光門という大きな山門があります。先頭隊の皆さんが和光門に着いてから我々が到着するまで一時間ぐらいあったと思います。その和光門のすぐ先には七面山本殿の敬慎院。当然先頭隊の皆さんは敬慎院に入って暖を取っていることと想像していたのですが、なんと全員和光門で我々を待っていて下さったのです。標高約二千メートル、日も落ち始めた寒風吹く一時間。どれだけ寒かったことでしょう。私だったら先に行っていたかもしれません。それでも「自分だけの都合好くではなく皆一緒に、待つ」。娑婆世界では「自分だけ」

七面山和光門 ずっと待って、全員そろって笑顔です



と私がちなところを「自分以外の誰かの為にあえて待つ」。

今回、七面大明神はその

「待つ」という菩薩行を教えて下さったのだと思います。全員で七面大明神の本堂に到着した時、一人ひとりの笑顔や涙の顔が菩薩さまに見えました。

\*

最近ではスマホを筆頭に便利な世の中になりました。便利だからこそ「待つ」ことが少なく、「待つ」ことが出来なくなっている気がします。だからこそもう一度「待つ」、時には「あえて待つ、それでも待つ」ということを大切に今年は過ごしていきたいと思っています。そして今年も一人でも多くの方と一緒に手を合わせていきたいと思っています。